

の結果から個人を抽出し、実践指導を行うことにした。

(1) 研究対象者の抽出

研究対象者の抽出は学級毎に次のような基準で行うようにする。

(a) 評定尺度による評価が低い状態を継続している児童・生徒 (2~3人)

(図1参照)

(b) 評定尺度による評価が高い状態から低い状態に変化した児童・生徒 (2~3人)

(c) 評定尺度による評価が低い状態から高い状態に変化した児童・生徒 (2~3人)

(2) 抽出した児童・生徒の要因分析

抽出した児童・生徒に対しては、先ずYGテストを行い、性格的要因を分析し、その結果により指導のあり方を探るようにする。

(図2参照)

小学校1~2年の児童に対しては、FAT(学力向上要因検査)を行うようにする。また、GAT(不安傾向診断検査)やDAT(問題性予測検査)なども準備し必要に応じて用いるようにする。

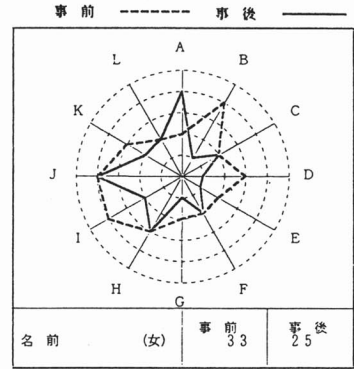


図1 評定尺度による自己評価が低い状態を継続している児童の例(小学5年生)(A~Lの記号は評定尺度の項目を示す)

(3) 指導実践に当たっての留意点

- ① 教科指導を中心とした実践指導であっても、それだけに終ることなく、特別活動を通しての指導も併せて行うなど、効果的な指導のあり方を探るようにする。
- ② 学級担任との連携強化を図り、児童生徒の個性を重視した指導を行うようにする。
- ③ 家庭や地域社会の習慣などを重視した指導を行うようにする。

図2 性格要因分析と指導・援助の例

自己教育力にかかわる性格要因分析と指導・援助

◇ 抽出児 S・M

(1) 抽出の理由(a型)

評定尺度の12要素の総計が他の児童と比べ、やや低い状態を継続している。要素Gの向上を目指し、学習の仕方等の改善を図ってきたい。

<評定尺度による調査結果>

評定尺度 II (児童の自己評価)      評定尺度 I (教師の観察評価)

(2) YG性格検査の判定(E型)

この児童は引っ込み思案で、自分に自信がなく、友人にひきずられがちな性格と思われる。(a.g, a, I) また、小さなことが気になって、精神的にやや不安定で、楽観的に現実を直視することのできにくいタイプである。(D, O)

しかし、社会的外交性(S)が高いこともあり、交友関係次第では、望ましい成長が期待できるものと思われる。

(3) 評定尺度IIとの関連

内気で消極的な性格もあり、G及びKの項目は低い状態とどまっている。また、教師のこれまでの様々な手だてにもかかわらず、A, D, E, Lの項目は事前調査の結果に比べ、事後調査の結果が低い値を示しているのは、この児童が持つ劣等感が及ぼしているものと思われる。

(4) 今後の指導・援助

これまでの継続的な実践から、評定尺度I, IIともC, F, Hは向上している。特に、評定尺度Iでは、B, Cが2段階向上している点、著しい改善が認められる。

しかし、この児童の性格面では、消極的でやや強い劣等感が認められることから、授業の中では、教師の励ましや、賞賛の声がいっそう大切になってくると思われる。

神経質で、必要以上に自己を過小評価している点があるので、学習や生活の中で自分自身に自信を持たせるような手だての工夫を図りたい。

E系総数 10    C系総数 5    A系総数 2    B系総数 5    D系総数 0